

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター

執筆担当：斎藤登美夫

◆◆◆ No.0822 ◆◆◆

25/01/08

【 為替のボラティリティが上昇、今年も大変動を期待!? 】

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。皆様にとって、良い一年でありますように。

昨年 12 月のドル/円相場は、月間変動がなんと 11.24 円(146.85-158.09 円)。年間を通して 2 番目の大変動となった。(1 位は 7 月の 12.35 円)

いずれにしても、一時期落ち着きを取り戻しつつあった為替市場のボラティリティが年の後半にかけて、再び高まってきた感を否めない。足もとの 1 月相場はもちろんのこと、2025 年という年間を通して大相場を期待したいところだが果たしてどんな一年になるのだろうか。

◎20 日に「トランプ新米大統領が正式誕生」、相場は波乱含みか

前述したような状況を踏まえ、今回の当レターでは月初恒例である経験則から見た「1 月の月間見通し」をまずはレポートしたい。

1 月相場の戦績について、1990 年以降昨年まで過去 35 年間を振り返った場合、勝率は 15 勝 20 敗となっている。数値的にも 6 割弱と極端に偏っているわけではないものの、ドル安・円高が有利となっていることはスグにわかるが、実は近年は 8 割近くが「円高」に振れている。実際、2014 年以降という過去 11 年だけに限定すれば、ドル高・円安方向に振れたのは 2016 年と 2021 年、そして昨 2024 年の 3 回のみ。残りの 8 回はすべてドル安・円高に振れていた。改めて指摘するまでもなく、今年のドル/円もここまでなんとなく、ドル高方向を意識した展開をたどっているものの、経験則的にはこうした流れが今月末まで続かない可能性もありそうだ。頭の片隅に、是非ともとどめておいていただきたい。

そんな 1 月相場には、ほかにも幾つの特徴があるのだが、なかでも興味深いものとなると、以下の 3 つだろう。ひとつずつ順を追って説明していく。

最初に取り上げるのは、「月間を通した値動きが両極端である」ことで、動く年はかなり激しい価格変動を記録するものの、逆に動かない年はピタリとベタ凧状態が続くことも少なくない。前者の「よく動く 1 月相場」については、年明け早々の 3 日に、いわゆる「フラッシュクラッシュ」と呼ばれるドルの暴落を演じた 2019 年が思い起こされるだろう。

それに対して、「動かない」という年も実は決して少なくないのだが、周知のように今年も 20 日の米国でトランプ新大統領の就任式が予定されており、前後から実施が予定される「トランプ政策」をにらみ金融市場は波乱含みの様相だ。

たとえば、トランプ氏自身の発言などをもとに、気候変動対策の国際枠組み「パリ協定」や、世界保健機関(WHO)からの早期脱退もまことしやかに囁かれているが果たして如何に。噂や思惑にとどまらず、それらが実現するとなれば為替市場がまったく影響を受けないはずがないだろう。思わぬ価格変動にも一応注意しておきたい。

次に、一年 12 ヶ月を比べて見た場合、不思議なことにドル/円相場は年明け早々の「1 月に一年の天底をつける」ケースが非常に多い。

事実、1990 年以降昨年までの 35 年間で 15 回の「年間天底」を記録していた。確率にすると、約 43% というなかなかの高確率になる。実際に比較的喫緊の事例だけを取り上げても、2016 年と 2017 年は 1 月に年間のドル最高値を示現しているほか、2013 年と、2019 年そして 2021 年から 2023 年までは 3 年連続で逆に 1 月安値が結局年間を通したドル最安値となっていた。もちろん、毎年必ず起こる事象ということではないものの、今年についてもやはり注意しておきたいところだ。

そして最後 3 つ目の特徴は、「1 月の月足陰陽と、年足陰陽が同じになる確率が高い」——ことになる。1 月の月足が陽線であれば、その年一年間は年間を通してドル高・円安に振れる公算が高く、実際に年足も陽線引けとなるケースが多く確認されている。

ちなみに、こちらについても 1990 年以降昨年まで過去 35 年間の戦績を調べてみると 22 勝 13 敗だった。確率としては 6 割強で、昨年も「1 月陽線(ドル高進行)」、「年間陽線(ドル高進行)」で上記した経験則ど

